Gabriel-Ernest

by

Saki (H. H. Munro)

超訳

ガブリエル・アーネスト

天邊舍

ごあいさつ

このたびは『超訳　ガブリエル・アーネスト』を手にとって頂き、ありがとうございます。

私自身の翻訳の練習と共に、青空文庫では掲載されていない作品の数々を紹介できればと思い立ち、パブーでの電子書籍化に至ったというワケです。

まだまだ勉強中の身ではありますし、誤訳もたくさんありますが、言ったモン勝ち・やったモン勝ち！精神にのっとって厚かましくもアップしました。（え？超訳の向こう側をいっているような気がする？気のせいさ！）

なお、翻訳にあたって使わせてもらった原文のサイトは以下の通りです。こんな作品がタダで読めるのって本当に素晴らしいですね☆
参考URL：Read Book Online
（http://www.readbookonline.net/readOnLine/772/）

このトンデモ訳が、みなさんがサキ氏のミステリアスで何だか無性に惹かれる世界を知るためのきっかけになればと思っております。

2012年12月
訳者：尾崎チカ

※この作品は短編小説ではありますが、訳者の勝手な都合で3章構成になっています。
本当は1ページでサラっと読めちゃうのにね！ではいってらっしゃいませ～。

サキについて（**Wikipedia**より）

ペンネームのサキ（Saki)として知られるヘクター・ヒュー・マンロウ(Hector Hugh Munro、1870年12月18日 - 1916年11月14日）は、ミャンマー生まれのスコットランドの小説家である。

『レジノルド』・『獣と超獣』・『クローヴィス年代記』などの短編集があり、欧米ではオー・ヘンリーと並ぶ短編の名手とされる。しかし日本での知名度はオー・ヘンリーほどではない。全部で2長編135短編および戯曲4編が発表されており、短編の半数以上は邦訳されている。

オー・ヘンリーの作風が庶民的で情緒的、サキのそれは貴族的で冷笑的、という見解が通説としてあり、登場人物や彼らの暮らしぶり等には確かに顕著な懸隔がある。しかし、両者とも掌編にて理不尽を描き出す巧者として今も並び賞されている。

参考URL：Wikipedia
（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%82%AD）

１、

「お前んとこの森、獣がいるよな」
　駅へと向かう馬車に揺られながら、画家のカニングハムがぽつりとこぼした。彼は目的地までその一言しか口にしなかった。というのも、連れのヴァン・チールがひっきりなしに喋り続けたので、無口なカニングハムが口を挟む必要は全くなかったのだ。
「迷い込んだ狐とか住みついちまったイタチだろ？なんてことないさ」とあしらうヴァン・チール。そしてまた喋り出す。呑気なものだ。職人気質のカニングハムはむっつりと押し黙って、もう何も言わなかった。

「そもそも君の言う獣って何だい？」
駅のホームに二人並んでいると、ヴァン・チールが尋ねた。カニングハムは答える。
「何でもない。むっつりお得意の妄想だ。ほら、列車が来たぞ」

　その日の午後、ヴァン・チールは自分の森へいつもの散歩に出かけた。彼は野に咲く植物の名前もよく知っていたし、書斎にはいかにもそれっぽいサンカノゴイ（※コウノトリ目サギ科に分類される鳥類の一種）の珍しい剥製があった。だから、何も知らない彼のおばが自分の甥っ子のことを聞かれたら、偉大な博物学者ですと言ってしまうだけの要素がそれなりに揃っていたのである。それはさておき、彼には偉大なウォーカーの素質があった。ものすごく健脚だったのだ。散歩の途中で見た物全ての感想をメモするのを常としていたが、一介の自然科学者のようにつけたものではなく、あくまで人との話のネタにするためのものであった。ブルーベル（※ヒアシンス科ヒアシントイデス属の春咲きの球根性多年草）が花開く頃には、開花までの瞬間一つ一つ全てをみんな伝えた。自然もヴァン・チールと同様に、彼の言葉に耳を傾けている者、つまり全ての人間に平等に季節の訪れを語り掛けてくれていたのかもしれない。その声が届かないかわりに、聴衆たちはこのヴァン・チールこそが自然と人間を繋ぐに相応しい男だと信じていたのである。
　ヴァン・チールが目にした光景は、彼の今までの経験をはるかに超えるものだった。樫の雑木林の窪地にある深い池に、すべすべした石段が張り出している。その上に、16歳くらいの少年が一人、手足をだらんと投げ出して寝転んでいたのだ。陽の下でその褐色の四肢をゆったりと乾かしているではないか。少年の濡れた髪は、水に飛び込んだせいで乱れたのか、いくつか束になって顔に張り付いている。薄茶色の瞳は虎のそれのようにぎらつく明るさだ。その両目は、気だるそうだが油断のない動きでヴァン・チールを捕えた。予想もしていなかった幻を目の当たりにして、ヴァン・チールはその口を開くまで自分が小説の中の人物になったような気でいた。この野性的な見てくれの少年は、一体どこからやって来たのだろうか？考えを巡らせる。そういえば粉ひきの奥さんの子どもが二ヶ月前に行方不明になっていたな。水車に巻き込まれたって聞いたが…いや、違う。あれは赤ん坊だった。こんな成人しかけの少年じゃあない。
「そこで何してる？」ヴァン・チールは尋ねた。

「見てわかんない？日光浴なんだけど」と答える少年。
「家は？」
「ここ。森」
「この森は君みたいな子が勝手に住むようなところじゃない」ヴァン・チールが言う。
「こんないいとこなのに？」少年は猫なで声で食い下がった。
「しかし…夜は？寝場所は？」
「夜？寝るもんか。ハンボウ期ってやつさ」
ヴァン・チールはこののらりくらりとした態度にいら立ち始めていた。
「食事はどうしてる？」と聞くと、少年は、
「な・ま・に・く、だよ」
と、今まさにその食べ物を味わっているかのような、うっとりとした調子で答えた。
「生肉だって！一体何の？」
「何？興味あんの？飼われてるウサギとか鳥に、飼われてないウサギとか鳥だよ。あとヒツジとか？あぁ、人間の子どもも食うね。食えたらの話だけど。オレの一番のかき入れ時に限ってあいつら鍵のガッチリ掛かった家の中にいるもんだから、手も出せやしない。あの味、二ヵ月ご無沙汰ってとこだな」
最後の冷やかすような言葉は無視して、ヴァン・チールはその少年を密猟の可能性のある対象としてみなし、問いただそうとした。
「野ウサギを食べる？大ぼら吹きめ」彼は少年の見てくれから考え、その話がまったくもってあり得ないことだと判断したのだ。
「ウチの森のは捕まえるのに苦労するからな」
「脚四本で捕まえるって言っても？」何だかなぞめいた答えが返って来る。
「おそらくあれだろ、犬かなんかに捕らせるんだろ？」ヴァン・チールは思い切って自分の考えを口にしてみた。少年は犬みたいに伸びをして、低い奇妙な声で笑った。それはクスクスと笑うような心地よいものであると同時に、グルルルとうなるような不快なものでもあった。
「オレぁどんなお犬様も狩り仲間に向いてるたぁ思わないけどね。特に夜なんかは最悪」
ヴァン・チールはその少年の異様な喋り方や目の動きに、確かな違和感を覚え始めていた。
「この森に君を置いておくわけにはいかないなぁ！」彼はその気持ちをごまかすように高圧的な態度で言い放った。
「お兄さんの家に置いとくよりマシだと思うけど？」少年は答えた。
　ヴァン・チールの堅苦しいまでに秩序のある敷地で見つかったこの生まれたままの姿の野性児の予言は、ある意味警告であったのかもしれない。だが、売り言葉に買い言葉でヴァン・チールは言い放ってしまった。
「よし。もし出て行かないなら、俺は君を連れて帰ることにする」
　少年はそれを耳にすると、閃光のごとくパっと池に飛び込んだ。そしてあっと言う間にヴァン・チールの立っている岸辺に現れ、その濡れて輝く半身を打ち上げた。それがカワウソだったなら驚くに足りないことだ。だが、何ということだ！こんな子どもがやってのけるとは！ヴァン

・チールはその場にへたり込んだ。少年はもう一度笑った。今度のも、笑い声にも似たうなり声だ。そして電光石火のように驚くべきスピードでヴァン・チールの視界から消え、緑がうっそうと覆い茂る森の中へと飛び込んでいった。
「何て珍妙な生き物だ！」ヴァン・チールは立ち上がり、ズボンについた泥をはらいながらこうつぶやいた。そしてカニングハムのあの言葉を思い出していた。

「お前んとこの森、獣がいるよな」

２、

　ゆっくりとした足取りで家路に向かいながら、ヴァン・チールはあの奇妙とも言うべき若い野性児の存在が立証できるようないくつものローカルな出来事を頭に巡らしていた。
ここ最近、森にいるはずの鳥の群れの数が減ってきた。家禽も農場から消えている。どういうわけか、ウサギも日を追うごとに怯えが強くなっている。さらには、家畜では大きい方のヒツジでさえ、こつぜんと丘から姿を消してしまったという住民の声が彼の耳にまで届く始末だった。あの野性児、本当に縄張り荒らしの犬と一緒になって田舎で狩りができるのだろうか？少年は夜の狩りを「四本足でする」と言っていた。でも同時に、彼は奇妙にも「特に夜には」犬を伴わないともほのめかしていた。何だかとても難しい問題にぶち当たったようだ。
　ヴァン・チールはこの1、2カ月に起こった様々な略奪行為に考えを巡らせていたが、ある事件を思い出すと突然歩みも推理もぴたりとやめた。二ヶ月前に行方不明になった粉ひき屋の子ども！あの子はどうなった？水車に巻き込まれて消えてしまった子どもだ。でも待てよ、落ち着け。母親はいつでもこう証言していた。「子どもの悲鳴が聞こえてきたのは家の丘に面した場所からで、水場のある側ではない」と。いやいや、これはもちろんありえない話だ。首を横に振る。しかしヴァン・チールは、なぜか例の消えた子どもが「子どもの肉なんてご無沙汰だよ」などと異様な発言をするあの少年の二ヶ月前のエサになっていないことを祈った。あいつの言葉にあてられたのだろう。そんなおそろしいことは冗談でも決して口にするべきではないというのに。
　ヴァン・チールは彼の習慣に反して、森で見つけたものを隠し立てせずみんな話してしまおうという気にはなれなかった。彼の平和に対する正義感や教区会の一員だという立場を考えると、この度彼の所有地に出た真相も疑わしい汚点を隠し立てすることを、なぜだか妥協案だと感じたのだ。例えその代償に、強奪された羊や、家のすぐ近くで殺されたであろう家禽の被害で多額の損失を被っても、だ。そんなことばかり考えていたので、いつも陽気なはずのヴァン・チールは、この日の夕食では珍しく黙っていた。
「お前のやかまし声はどこへ行ってしまったのでしょうね？」とおばのミス・ヴァン・チールが聞く。
「そんなに黙って、珍しい。まるで森で狼に遭ったみたいな顔してるわ」
　当のヴァン・チールは、この老女の言ったことを冗談と取ることもなく、頭の中でこう返事した。「もし仮に狼を見ていたとしたら、私のおしゃべりな舌はその対策に追われて、せわしなく活動していたでしょうよ、おば上」と。冗談も冗談なら、返事も返事だなーそう思いながら。
　翌朝の朝食の席で、ヴァン・チールは気付いた。この穏やかでない気持ちは、昨日の悩ましい問題が今朝も相変わらず頭をもたげているせいである、と。だからカニングハムを道連れに、大聖堂のある隣街へ列車で行くことに決めた。彼を、友人の所有する森に獣がいるという発言へとかりたてた何かを見た件について話が聞きたかったからである。その決定事項を胸に留めることで、ヴァン・チール持前の明るさが次第に戻って来た。そして彼はいつものように居間に煙草を吸いに行く途中で、ちょっとした明るいメロディを口ずさんだ。だが、ヴァン・チールが部屋に入ると、歌を止め、敬虔な祈祷文を繰り返すこととなった。誰かがオットマンに優々と寝そべ

っているのが目に入ったのだ。大の字になっておおげさな休み方をとって…待てよ、あの森の少年ではないか！少年の体は、ヴァン・チールが前に見た時より濡れてはいなかった。だがそれ以外に自分の身なりを手直ししたあとは見当たらなかった。
「なんでお前がここに⁉」ヴァン・チールは猛然と問い詰める。
「お兄さんが言ったんだよ。オレがあそこにいちゃあいけないって」少年は落ち着き払って答えた。
「この屋敷に来いとは言ってないぞ。もしおばに見られでもしたら…！」
最悪の事態を何とかを最小限に食い止めようと、ヴァン・チールは急いでモーニング・ポストを広げると、その小さな招かれざる客の体を覆い隠そうとした。その瞬間、彼のおばが部屋に入って来て、その姿が見つかってしまった。
「こちら、えーと…帰り道を見失った少年です。記憶も！そう、記憶もない。自分が誰で、どこから来たかもわからない。可哀そうなもんです」ヴァン・チールはやけになってそう説明した。この浮浪児が、面倒な正直さを発動して「子どもを食べる」とか何とかいう野蛮な趣向を付け加えないでいてくれるかひやひやして、説明する間中少年の顔をちらちら見ていた。
　ミス・ヴァン・チールはひどく興味津々だ。
「下着はもう見たの？きっと何かしらの情報が書いてあるはずだわ。ほら、名前やらね」彼女はそう提案した。
「いやぁ、着るものもなくしてしまったようで…」とヴァン・チールは言った。少年の体は大慌てでひっつかんだモーニング・ポストのおかげで隠すことができた。
　素っ裸の子どもホームレスは、ミス・ヴァン・チールに迷い猫とか捨て犬がそうするような熱烈な視線で訴えた。
「まぁ！そんな子のためなら何でもしてあげるわ！」彼女はそう決めると、すぐに使用人をボーイたちのいる牧師館にまで使い走らせた。ちょっとすると、使用人は一揃いのスーツに、シャツや靴や襟などに必要な装飾品までを手に戻って来た。少年は服を着せられ、小奇麗にされ、髪をなでつけられた。ヴァン・チールの目は、つい先ほどまで危険極まりない野性児だったあの少年の姿を、今の彼のどこにも見つけることが出来なかった。そしてミス・ヴァン・チールの目には、少年がただただ愛らしく映った。
「ねぇ、この子の正体が明らかになるまでの名前をつけてあげるのはどうかしら？」彼女は言った。
「ガブリエル・アーネスト。いかが？ぴったりのお名前でしょう？」
　ヴァン・チールは、口では賛成こそすれ、その名前はもっと別のちゃんとした子どもに与えられるものではないだろうかと内心思っていた。彼の不安は減少しなかった。なぜなら、この野性児が初めてここに侵入してきた時には、年寄りではあるが真面目なスパニエル犬は屋敷の外に出ていたわけだ。番犬替わりにはなったはずだというのに。そして今は今で、果樹園よりもっと遠くへ向かってブルブルと震えながらキャンキャンと吠えたてている。いつもは主人のようにまめに歌うカナリアも、今日は怖がってチーチーと鳴くばかりである。これらの異状を目の当たりにし、ヴァン・チールの心には一刻も早くカニングハムと会って話をしなくては、という思いが

募るばかりだった。
　ヴァン・チールが駅に降り立ったその頃、ミス・ヴァン・チールは例のガブリエル・アーネストをお供につけて、午後のお茶会に出掛けていた。彼女が日曜学校で教えている小さな紳士・淑女の楽しいお相手になってくれるよう頼んだのだ。
　ヴァン・チールが話し終わると、カニングハムは最初のうち絶句していた。だが、彼はぽつりぽつりと話しだした。
「母親は死んだ。頭がイカレてな。だから、俺が見たかもしれないモノとか俺が見たと思い込んでいるモノについて話すのをためらっているのも…その…わかってくれるよな？」
「話せよ、君が見たのは何だったんだ？」友人はなおもしつこく問い詰める。
「俺があの時見たと思うのは、気でも違えたかと思うくらいに変なものだ。本当にまともな人間なら、その話を自慢の種に取っておいて、もったいつけて話すことができるわけがないくらいにな。俺は立っていたんだ。この前一緒に話したあの日の晩方だ。果樹園のところで生垣から半身を出して、沈んでいく燃えるような夕日を見ていた。すると突然、裸の少年がいることに気がついたんだよ。近所の池へ水浴びに来た子だろうと思った。その子はむき出しの丘の斜面に立って、同じく夕陽を見ていた。その佇まいは何というか、ローマ神話に出てくるファウヌス（※山羊の角と足を持った半人半獣の森や牧畜の神）を連想させるものだった。俺は画家だ。彼をモデルとして雇いたいという衝動にかられた。まず声を掛けよう。そう思った。でも、ちょうどその時に陽が沈んで、あの焼けるようなオレンジと溶けるようなピンクが景色の向こう側へとすべり落ちていった。周りはモノクロの冷たい夜だ。その瞬間、驚くべきことが起こっていたのを見た。あの美しいファウヌスもまた、姿を消していたんだから」
「何だって？まったくすっかり姿を消したっていうのか？」ヴァン・チールは白熱して聞いた。
「いいや、この話にはまだ続きがある」とカニングハム。
「そのむき出しになった丘の斜面っていうのがポイントなんだ。少し前までその子が立ってたはずのそこに、一匹の狼がたたずんでいたんだ。黒みがかった毛並みにチラリと光る牙。そして冷酷な黄色い瞳。おそらく彼が…」
　だが、ヴァン・チールはすでにこの友人の憶測を馬鹿らしいと言える域を脱してしまっていたのだ。彼はもう駅までの道のりを全速力で駆け抜けていた。電報を打つのは諦めよう。「ガブリエル・アーネストは狼少年」と言ったところで、この切迫した状況は１％も伝わらないのだ。仮にミス・ヴァン・チールがメッセージを受け取ったとしても、自分の甥っ子がヒントをつけ忘れた暗号か何かだと思うに違いない。彼はせめて陽が暮れるまでに屋敷に戻れることを祈った。列車から飛び降り、駅からは馬車に乗った。だが、何と遅いことだろう！どんなに鞭を振るっても、田舎の往来はのんびりとしたもので、それがまた彼をいらだたせた。そしてヴァン・チールの焦りとは裏腹に、沈みゆく夕陽がその道をピンクや薄紫の美しい色に染めていった。

３、

　ヴァン・チールが屋敷に戻ると、彼のおばが食べ掛けのジャムとケーキを片づけているところだった。
「ガブリエル・アーネストは!?」叫ぶような声で問いかける。
「あの子ならトゥープさん宅のおちびさんを家まで送って行ってくれているわ。いつもより遅くなってしまったから、一人で帰すのが心配でね。まぁ見て、素晴らしい夕陽だこと」
だがヴァン・チールは西の空を見ることなく、踵を返して屋敷を出た。おばと一緒に夕陽がきれいだのどうだのと言っている場合ではない。トゥープ家まで続く狭い道を、めったに出さないような猛スピードで駆け抜ける。走って行くと、片側には用水路を流れ、水車へと勢いよく注ぐ水の流れが、もう一方には悠然と広がるむき出しの丘が姿を現した。次第にその縁を狭めていく夕日は、何とかまだ地平線上にある。次の角を曲がったら、自分の追っている最悪の組み合わせに、あの二人連れの姿に出会えるに違いない。ヴァン・チールは祈るように自分に言い聞かせた。その時、そこら中にあるものの色が消え失せた。空を見上げると、鈍色の光が夜空に垂らした水銀のように、風景によく映えている。日が暮れてしまったのだ。ヴァン・チールは恐怖におののく甲高い叫び声を聞いて、馬を止めた。
　探している二人の姿はなかった。だが、ガブリエル・アーネストの衣服が道に転がっているのが見つかり、大人たちはこう結論付けた。この服は、トゥープ家の子どもが水にはまってしまったのを助けようと飛び込む際に脱ぎ捨てられたものであろうと。そしてガブリエル・アーネストの勇敢な試みと二人の体は、無情にも冷たい水と共に流されてしまったのだと。ヴァン・チールとその時近くにいた労働者たちは子どもの叫び声を聞いたと断言した。彼らは服が見つかった場所のすぐ近くにいたのだという。12人の子を持つトゥープ夫人は、その中の一人との死別を甘んじて受け入れた。一方でミス・ヴァン・チールは、行方不明の拾い子を想って心の底から嘆き悲しんだ。彼女の意向で、ガブリエル・アーネストの死を悼む真鍮製の記念碑が教区教会に飾られることとなった。そこには次のような言葉が刻まれていた。

ガブリエル・アーネスト
他人のために命をなげうった　勇敢な無名の少年に捧ぐ

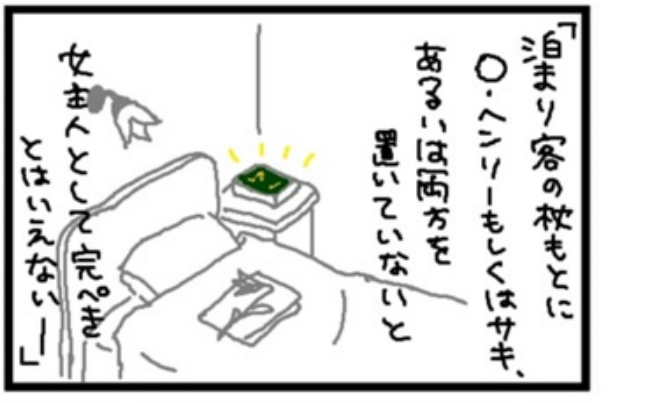
　ヴァン・チールは彼のおばにほとんどのことを好きにさせてはいたが、このガブリエル・アーネストの記念碑だけはきっぱりと拒絶したのだった。　≪完≫

ちょうや！

あとがきマンガ vol.1

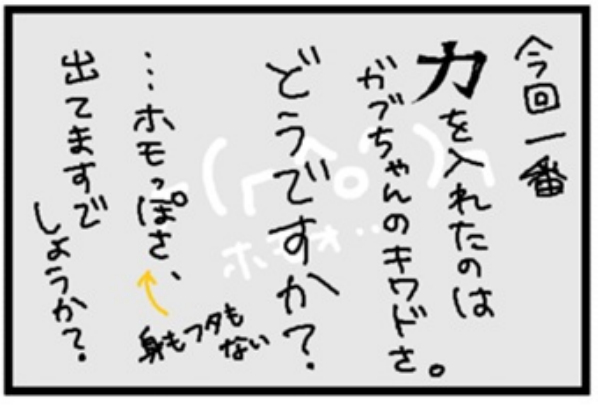
尾崎チカ 画

1.

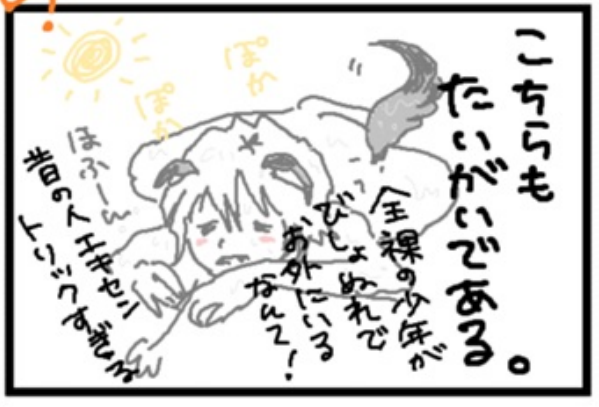


2、

余談入ります。
サキ氏はゲイなので
作品にも中性的な
魅力やあやうさを
出していかねば！と
ナゼか意気込み、


今回一番
力を入れたのは
かづちゃんのキワドさ。
どうですかね？
…ホモっぽさ、
出てますでしょうか？
身もフタもない

私事ですが、
以前いとこ（若者）が
古典はつまんないから読まない。って言ってましたが、
きっぱり
本は好き。


こちらもたいがいである。
全裸の少年がびしょぬれでおかしいなんて！
ぽかぽか
ほふーん
昔の人キャセン
トリックすぎる
右！

3、

「文学」という傘の下
エロい本を読めるって
いうのも
古典の醍醐味だと
思うのですよ。
救いようがないのですよ。
デェフ…

だからみんな、
もっとたくさん
読めばいいんじゃあ
ないかな。
しゅばっ
しゅばっ

そんな
どうしようもない
私ですが、
アシスタントの天野くん
駄目だこいつ…
早く何とかしないと…
ハッ!!

今後も様々な
作品に挑戦してみたいと
考えておりますので、
さよなら、さよなら。
これからも
どうぞよろしく
お願いいたします。
《つづく》